

## 第6章 中興期II 40周年を契機に再生し、1部昇格 年表

- 1983年 (昭和58年) 春期リーグ戦において早稲田を破り久々の1部5位となる。  
同年関西遠征を行なう。  
秋期リーグ戦では最下位になるも、入替戦を4―3で勝ち1部残留。  
小柳、協会主務としてアジア大会参加。  
練習・試合にビデオ撮影導入
- 1984年 (昭和59年) 春期リーグ戦において男子2部降格。  
筑波大学との交流試合始まる。  
早坂 (大山) ・永井 (臼井) 関東選手権B女子ダブルス優勝。  
12月有志7人で香港遠征。
- 1985年 (昭和60年) 渡辺武彦関東学連委員長になる。  
9月香港YMCAチームと日吉で交流試合を行なう。  
秋期リーグ戦で女子3部降格。  
松野・松浦 (法大) 全日本初優勝。
- 1986年 (昭和61年) 春期2部最下位になるも、入替戦に勝ち残留
- 1987年 (昭和62年) 諏訪国際ユース大会ソ連遠征でダブルス3位になる。  
平部長、日本学生チーム団長として中国遠征。

## 概説

1983年のころは、慶応バドミントン部におけるルネッサンスと言える。それは単にインターハイ優勝の馬場主将を初め強い選手が集まって、1部に昇格しただけではなく、封建的な因習を打破して良いクララにしようという理想に満ちていた。部員はプレーをビデオに撮ったり、世界のトッププレーの情報を研究したり、他のクララの練習に参加したり、鎌谷、長谷川、松浦と言った有名選手が日吉に来たり、部誌の上や酒を飲んでバドミントンの議論をしたりして、自分のプレーのイメージを作る刺激を求めていた。練習方法も目標をインカレ優勝においてオフ中の150Km走り込み、練習は毎日行ない自主管理で休む方式、男女混ぜてランクをA B C Dに分けて週間毎に入替戦を行なう等ユニークなものを打ち出して行った。その結果、春期リーグ戦で早稲田に勝ち欠々の1部5位となった。秋期は、最下位に終わり筑波との入替戦になったが、3—3のまま体育館が使用できずに最終シングルは持ち越しになったが、永井悟の頑張りで1部に踏み留まった。

1984年も前年の良い点を受け継ごうとしたが、主力が抜けたための弱体化は否めなかった。それを克服するためフットワーク等の反復練習を多く行なったが、春期リーグ戦は1勝3敗と大敗して、入替戦も2—4で負け2部に降格してしまった。早慶戦では、7—7になるも草場のシングルが負け、結局負けてしまった。1部復帰をかけた秋期リーグ戦も初日負けたのが痛く4位に終わった。しかし、インカレでは西日本2位の京産大を下しベスト8は守った。その冬にOB、現役7人で香港に遠征を行ない、広い視野が得られた。

1985年は、記念館の床工事のため、体育館を転々とした。春期リーグ戦では1年をいきなり起用しなければならぬ苦しい布陣で、5位に終わった。夏合宿は日吉で2度行い、下級生のレベルアップを図った。9月下旬に香港YMCAと交流試合を日吉で行い、親交を深めた。しかし、秋期リーグ戦では男子は5位に女子は3部降格してしまった。この年、野球部、蹴球部が欠々の日本11になったのに比べ、ふがいない成績に終わってしまったが、下級生のレベルアップは見られた。

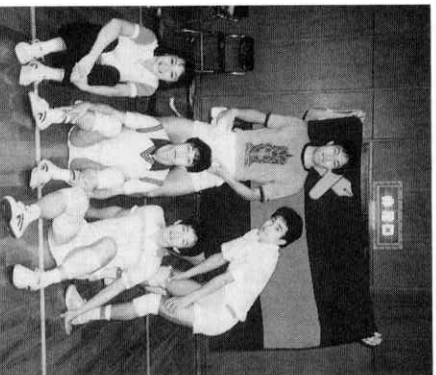
1986年は、主力が抜け、しかも4人が3人のみで3年中心のチーム構成だったため体力と基本中心の練習となった。春のリーグ戦では最下位となってしまったが、なんとか入替戦に勝ち残留した。更に厳しい練習を積み重ね、まず東日本で札幌大を下し、ベスト8を守ったが、早慶戦は大敗した、秋のリーグ戦は全てのチームにチャレンジ精神で臨み、5位に終わった。結果的には満足できなかったものの1年生の成長が見られ、なんとか土俵際残したような1年間であった。

1987年は、2月11日より練習を開始し、春期リーグ戦では、チャレンジ精神をモットーに練習に動んだ結果を発揮し、又志気を高める為に行った日吉での2次合宿が功を奏し、2部3位となった。又、夏に平部長が中国遠征日本学生代表チームの団長として、諏訪が第1回リ連国際ユース大会に日本代表として参加した。後期に入って、東日本ではベスト8を確保したが、早慶戦は1ポイント差の7—8で惜敗してしまった。秋期リーグ戦では、春3位だったので、1部復帰を念願に戦ったが、青学に2—5で敗退したことにより沈滞ムードが続き、4位だった。インカレでは、東海大に3—1で敗退し、ベスト16であった。

(草場 記)

## 一貫教育とバドミントン

佐藤 研旭 (昭和61年卒)



後列 木村・渡辺  
前列 永井 (白井) ・佐藤・永井

創部50周年おめでとうございます。

私が塾のバドミントン部と出会ったのは、普通部の時です。で、もう17年間のつき合いとなります。その間、普通部、塾高、そして大学の時までも主将を務めさせて頂き、大変光栄に思っております。そこで「一貫教育とバドミントン」というテーマを与えられましたので考えてみたいと思います。

一貫教育ですから当然、中学・高校と受験勉強はしませんでした。そこで、バドミントンに没頭することができました。ただ、他にも色々な誘惑があり、そちらに流される可能性もあります。また、中学・高校・大学とそれぞれキャンパスがすぐ近くなので、先輩の指導を受ける機会にも恵まれました。そのような中で、いい意味での上下関係を教わりました。そして、慶応独特のカラーを、良い点、悪い点共に、受け継いできたように思います。今、ふり返りますと、そこで得た、先輩・後輩及び同期との縁は大変貴重なもので、それだけでも、塾でバドミントンを続けてきてよかったと思っております。また、このよき出会いが、普通部・高校・大学とバドミントン部に継続してきた大きな要因でした。もちろん、バドミントンがしたい、というのが第1の要因でした。

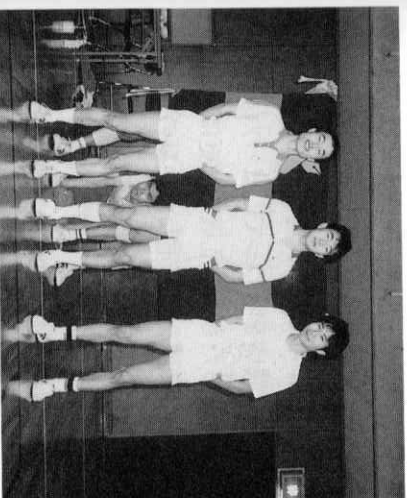
さて、それではその実力はと言いますと、中にはすばらしい成績を残された先輩方もいらつしやいますが、最近では低迷していると思います。塾高生はバドミントンにうち込むには恵まれた環境にあるにもかかわらずです。その原因には練習方法、素質、専任の指導者の欠如などが考えられます。しかし、その根本の原因は、一貫教育ゆえの閉鎖性にあるのかもしれない。一貫教育の中では外部の新しい動きを受け入れにくい環境があります。その閉鎖性が逆にまとまりを生み、中にいる者は心地よいのですが、これが悪い方に働くとなかなか修正するのが難しくなります。それが、今の塾高の状態ではないかと思えます。しかし、これは大学にとっても重大なことです。なぜならば、現在の大学の状況—受験難による部員獲得の難しさ—を考えると、塾高のレベルアップが体育会バドミントン部にとっても重要になってくるからです。ラグビー部がその好例だと思います。また、これが一貫教育の利点なのです。

それではどうしたらいいのでしょうか。私はそれを打開するには現役部員の協力が不可欠だと思います。社会人OBよりは身近ですし、時間もありません。特に外部から入ってきた部員は塾高にはない物の見方、考え方を持った人達です。この新しい血が、今、塾高に必要ですし、常に与え続けなくてはならないと思います。どうか現役諸君全員でこの問題に取り組んでもらいたいと思います。また、いくらレベルアップに成功しても、体育会に入部してもらわなければなりません。塾高生は体育会をシビアに見ているものです。どうか魅力ある先輩として、塾高生にとっても、外部生にとっても入部したくなるようなクラグにしたいと思っています。また、OBもそんな現役をバックアップしてやってほしいと思います。

最後はテーマと少しずれてしまいましたが、「塾高出身」の一OBの勝手な要望として聞いてほしいと思います。私も機会を見つけて現役部員達と話し合ってみたいと思います。近い将来に慶応義塾体育会バドミントン部が2部、そして1部復帰するのを願っています。

## 部の過渡期であった、苦しい1年

小俣 義頭 (昭和62年卒)



遷越・小俣・五味鼎

1968年は、主力選手が抜けて、非常に苦しい年であった。また最上級生である4年生が3名のみであり、3年生を中心としたチーム構成であった。レギュラー構成は、4年1名、3年3名、2年1名、1年2名ではあったが、全体的な力不足で、ポイントの計算できる選手が不在なままでの戦いであった。

オフ中の自主練習のノルマをこなし、春の集合練習は、男性12名、女性2名、総勢14名の現役選手を集めて、2月11日にスタートした。リーグ戦で勝利した経験のある者が2名だけとなり、至上的命題であった2部死守に向け、まずは体力と基本を中心に考え、密度の高いサーキットトレーニングや、ウエイトトレーニング等を実施した。春合宿は、寒さの厳しい山中湖にて実施した。3月中であるにもかかわらず、入部予定のレギュラー候補にも参加してもらい、ダブルスの組み替え等実施し、リーグ戦をにらんだ練習を開始した。

4月になり、新入部員が正式に入部となったが、男子に於いては、久し振りに有望な選手が数多く入部した。

インターハイ出場経験のある岡田、高田、喜多に加え、塾高、志木高から、清水、土屋、加藤と、正しく将来の本塾をしようてたつにふさわしい面々であった。

そんなことで、2部で勝たねばならないという大命題があったものの、シーズンを通しての練習の基本理念は、まず下級生(特に1年生)を大きく育てるということであった。

まずは基礎体力、パワーアップ、そして基本練習と、一見つまらない練習を、全員で考えながら、繰り返し実施し、下級生の器を大きくする為の練習に終始した。

春のリーグ戦を迎え、懸念されていた試合経験不足と実力不足により、初戦、2日目と大敗を喫し、3日目の青学大との試合に臨んだ。この試合に勝負をかけた本塾は、ダブルスが終って3—2と1ポイントリード。第3シングル加藤(1年)が4ポイント目をもぎとり、チーム初勝利となった。続く4日目対関東学院大学の試合は、波にのる本塾が3—2とリード。第3シングル加藤が清涼を相手にフライングセツト10—0とリード。部員の誰もが本塾の勝利を信じ、4年生は2部死守が可能となり、昨年の2部5位より上位に行けるということで、うれしさのあまり、目に涙をうつすらと浮かべて応援していた。しかし、加藤にかかったプレッシャーも半端でなく、リズムを狂わせ、まさかの逆転負けを喫してしまった。3—3となって迎えた第4シングル岩田も、1歩及ばず、最終戦も3—4で敗れ、当部はじまって以来の2部最下位、入替戦という大きな屈辱を味わってしまった。入替戦の対明治戦は何とか4—2で振り切ったものの危機感には更に募った。この敗北を胸に秘め、更にきびしい練習を積み重ねた。夏のシーズンが開幕し、先ず東日本では札幌大を3—0で下し、ベスト8を守った。続いて上田で夏合宿をし、早慶戦、リーグ戦にそなえた。早慶戦は3—12と残念ながら大敗したものの、1番の狙いであったリーグ戦では、全てのチームにチャレンジ精神で臨み、2日目の対筑波戦で負けたものの3—4と健闘し、練習の成果に自信をもった。3日目には、春に続いて青学大に4—3と勝利したものの4日目には東海大に3—4で敗れ、屈辱ながら最下位をかけての大東戦となった。苦戦をしいられたものの4—3で勝利し、結果2部5位となった。

結果的には満足できなかったものの1年生の成長が見られ、なんとか士俣際やつと残したというような1年間であった。

翌年度以降は、レギュラー1名抜けたのみで戦力は着実にアップし、チームも上昇基調にのりだした。

最後に、この時鍛えた1年生が4年生となったとき、早慶戦に勝利したということが、せめてもの救いであろう。

## 女子バドミントン部

鈴木 慶子 (昭和63年卒)



鈴木 慶子

今年、また女子は2人になってしまった。この4年間は4年生が3人いたために人数不足の心配をしなくても良かった。しかし、来シーズンのリーグ戦で試合をするためには、最低2人の新入部員を入部させなくてはならない。せっかく現役選手が頑張っていて、悲願の2部リーグまであと1歩というところにいるにもかかわらず……。

思えば、私がバドミントン部に所属していた4年間も、常に、人数確保が重要課題の1つであったような気がする。

外部から強い選手に入部してもらおうと、東京や、神奈川の高校生の試合会場に足を運んだこともあった。連絡先を教え、連絡をとり、受験してもらっても、世間で私大最難関と言われる我が塾には、こちらが目を付けている学生が、なかなか入学できない。

そうすると、頼みの綱は内部進学者である女子高生ということになる。そのためか私以下現在の現役選手まで、全員女子高出身者で占められている。きつと、さぞかし今の女子高生もプレッシャーを感じているに違いない。それでも「2人以上は絶対入部してもらわなくては困る」というのが、OG・現役全員の気持ちだと思う。

しかし少人数にも良いところはあった。試合前のドロドロとしたレギュラー争いがなかったため、いつも和気あいあいとした雰囲気を保つことができた。それに、たった2人ということで、男子や、OB・OGの方々には特に目をかけていただいた。又、それに共に応えようと、励まし合いながら厳しい練習にも一生懸命ついていた。合宿などでのスパシャルメニューも、今では良い思い出となっている。あれ程スポーツに打ち込むことはもうないだろうと思うと、なつかしい……。

それまで、あまり物事を試行錯誤したことのない私にとって、2年間も女子バドミントン部の責任者としてトツツに立ち、部を運営

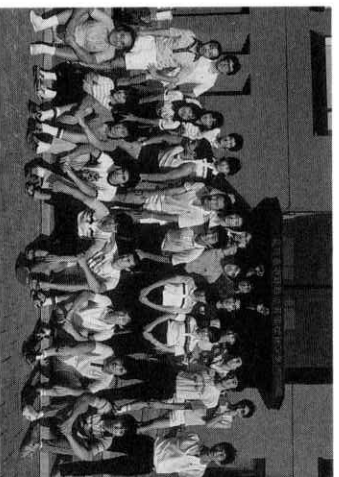
してゆくことは、とてつもない大仕事であった。頼りない女子責任者に、先輩や同期はさぞ心配し、又、後輩は不信任を抱いたことだろう。それでも、暖かい目でまわりから見守られ、後輩も黙ってついてきてくれたからこそ、無事に部を退くことができた。このバドミントン部に所属していた4年間に得られた、「粘り強さ」と「精神力」は、かけがえのない財産となり、社会に出た今、存分に生かされている。仕事などで起こるどのような難題も、頑張れば必ずできるというも思いながら臨むことができるようになった。輝かしい戦績を残すことはできなかったが、そればかりではなかったように思う。大変でも、4年間最後まで続けられたことで、自分に自信がついたのだと思う。

そんな、1度も退部を口に出さなかった私にも、何度か退部を真剣に考えたことがあった。練習の厳しさに加え、授業の方も段々と大変になり、いつも10個近いレポート課題をかかえていた。又、女子高出身の私は、7人もいる同期の男子の中に1人で入ってゆくことができなかったが、自分が辞めてしまうことで残る1人の部員と、女子部のこれから考えると辞めることはできなかつた。OGの方々の中にも同じ思いで続けられた方は多いだろう。しかし、そこでそれぞれが踏み止どまったからこそ、今50周年を部は迎えることができたのだと思う。

男子でさえつらいといわれる体育会の練習に、女子がついてゆくのは大変だが、是非これからも頑張って後輩を育て、自分も少しでも強くなれるよう努力して、いつまでも女子部を続けさせて欲しいと思う。

## 部誌について

草場 律 (昭和60年卒)



長野県勤労福祉センター前の  
集合写真

1982年から昭和59年卒小柳の提案でクラブに部誌ができた。この部誌は本部史と違ってノートに部員間で書いて巡すというもので1984年頃まで続き7巻までになった。

この中に封建的なクラブから自由なクラブへの脱皮、1部復帰へかける意気込み、試合に負けた悔しさ、部員にとどまらずに種々なゲストに書いてもらったりして、当時の部員の気持ちを代弁していると思われるので、この時代は部誌からの引用を中心にした。

## 部誌より転載

渡辺 俊二 (昭和58年卒)

始めまして主将の渡辺です。

5/10 (月) 光化学スモッグの日

今、家庭教師に來ていて、教え子は隣でグーグー寝てる。本日はスリング講座はなaimたい。ラッキー。教え子の奴、先日交機につかまって以来、ツツパリをやめて前髪をたらし、何とサーファーに変身しても一た。

さてさて、春期リーグ戦にも目出たく優勝をとげ、あと入替戦に勝つだけになりましたが、レギュラーの皆さん調子はですか。根性をすえて頑張ろう！

前項の小柳のメモは大変参考になった。どうもありがとう。それから1年生及び阿部、岡本、五月女、長い間本当にご苦労さんでした。これから、思う存分にコートで動いてくださいネ。

前のページに入替戦楽しく…なんて書かれてるが、楽しくなるかならないかは、結果次第でしょう。楽しくしたければ勝てばいいんだ。

1つの目標に向かって全員が真剣になるときに気楽になんてできるものなだろうか。もし、本当に気楽に勝ってしまったら春のトレーニングは何だったのかと思わないか？

選手にプレッシャーをかけまいとする言葉かもしれない。しかし、この平和な日本で、神経がピリピリし、勝つか負けるか、生きるか死ぬかぐらゐの極限状態で男が勝負をかける時ってないんじゃない。まして、学生においては。だからこそ、逃げてはダメだ。正面からプレッシャーを受けとめればいいし、プレッシャーにやられるか、打ち破るかは当人の精神力の問題で、当人がプレッシャーに勝つために“気楽に”と考えるのは自由だ。しかし、決してクラテ全体は“気楽”にはなれないはずである。

それでいいんじゃないか？出場するのは6人、後の20数名の期待を背おっているのだから、それぐらゐの責任はあって当然。



## 部誌より転載

荒木 (笹野) 尚子 (昭和58年卒)



1981年 (昭和56年)  
第29回慶早戦 女子集合写真

10月11日 荒木 (笹野) 尚子

もうすぐ終りだから…と部誌を渡されましたが、こういうの苦手であり、書くことがありません。ただ、リーグ戦最終日を2日後に控えて、やっと、というか、もう、ここまで来てしまったという感慨だけです。

私が1年だった春から、男子は、今季がチャレンス、今季がチャレンスと言い続け今春、念願の1部復帰ができましたし、その間に女子も密かに1部に上がって、また2部復帰(?)してきました。

トヨタ、木島平、岩井、トヨタ、岩井、日吉、岩井、木島平と合宿にもそれぞれの思い、出があるし、東日本では、山形、東京、札幌、盛岡、インカレでは京都、福岡と全国大旅行したようなものだナァと思います。

4年間にリーグ戦の1・2部校の顔ぶれも大きく変わったし、部自体もどんどん変わってきたようです。けれど、バドミントンをやりたくて大学を探したような私には、部はバドミントンをやる場所であったから、いろいろなことがありながらも、ここまでやってこられたように思います。

学生としてのゲームは、あさつてのリーグ戦とインカレだけですが、ここまでやってきたバドミントンは、これからもきつと続けていくと思います。学生バドミントンのキビキビした試合運営やプレーは一般では仲々見られないようですが、貴重なこの経験を大切にしていきたいなと思っています。

これから、1・2年生は新人戦に向かって、頑張って下さいね。3年生は来年のリーグ戦、早慶戦の目標を高く…楽しみにしています。

最終日は、学院院男子の応援に負けないように、男子のみなさんも応援してください。

## 部誌より転載

馬場 良浩 (昭和59年卒)



馬場・戸崎

1月22日 (土) 馬場

『今年の初夢…インカレ優勝！』

4/29 対中大戦オーダー

S1：馬場

S2：五月女 (早坂)

D1：永井・水村

D2：馬場・五月女

D3：早坂・藤原 (小柳)

S3：水村

S4：永井

Part Oneの練習も残すところ10数回。試験もピーク時となって、皆様子が大変でしょう。ま、常日頃、勉強しているボクなんか、いまさらどうしたって始まりやしないと楽勝気分です。興奮オーダー！中央戦考え始めちゃったら寝られなくなっちゃって困ったものなんです。倒す！！奴等に勝つ！！上のオーダーはPart One現在から考えた我が慶大バド部のベストオーダーのつもり。つまり、こいつらがリーダー戦まで、下の連中に抜かれずがんばらなきゃいけないってこと。逆にいったら、このオーダーに入っていない連中は、こいつらを蹴り落とすようPart 2でがんばって欲しいわけ。それでは、次のページで今後の練習計画を書いておくから、各自それなりの目的や方針をしっかりと決定してくださいよ。

Part 2：2/3 (木) ～3/24 (木) まで45回

(休み…2/6・20・3/6・20ともう1回)

・ Step 1→持久力、とにかく持久力 (＋ウエイト系)

コントロール

・ Step 2→スピード、とにかくスピード (持久力にプラス)

スピードプラスコントロール

・ Step 3→ミスをしないプレー＝完結編

ダブルス5組決定

練習の半分程は、A・B・C・Dのグループ別で行なう。Stepが移るときに入替戦を行い、グループを編成し直す。

〈2/3・スタート時グループ〉

A：馬場・永井・水村・五月女・早坂・藤原

B：佐藤・永井・小柳・草場・服部・小出

(Bのヒトががんばれば面白んだけど)

C：平野・阿部・神良・岡本・渡辺・木村

D：臼井・小川・池田・大山・酒井・大迫

又、練習内容はあらかじめ疲労度に応じてA・B・C・Dランクを記しておく。何日続けて出ていようと、限界となるような疲労は残らないプログラムとなるから毎日の積み重ねを重視してもらいたい。

A→女子全員泣き、もどす者若干名、インカレ勝てそーな内容

B→きつい練習

C→part1程度

D→からだほぐし

それからお願い!!練習中、あったかい目でクラテの連中を見てあげよう。『はげまし合ったら1部の連中恐くない。』  
シングルゲーム 味の素ならぬ『thinkingのもと』

1Step

a) ストレート中心で守るか、クロス中心で攻めるか?

b) オールショートの攻撃をするか、オールロング的体力勝負にするか?

c) 早いドリブンと遅いドロップまたは早いカットとハイクリアetc. どのような組み合わせで相手を惑わせるか

d) おそいスワッシュをどのくらいの割合で用いるか。ボディアとサイドの比はどのくらいか

2Step

a) 動き回るのが嫌いな人→いかにして相手にいい思いをさせて打たせ、それを楽に返球して落ち込ませるか。フワ。つまり、やや(完全にではなく)甘い返球をして強打させる。スワッシュのリターンは1番疲れないんだよ!!

(例) クロスの低いドリブン

ネットからの浅いはね上げ

(いかにも苦しそーな顔して上げちゃうのがコツ)

b) 後ろへ下がる動きの方がネット前に出ていく動きよりも自信がある人

↓

1：少々苦しくても、ドロップあるいはカットを苦しいポジションから多用する。

2：クリアよりもドロップ、カットの割合を高くする。

この場合、ホームポジションはあくまで半歩分、ネットに近

い位置におくこと。

c) bの逆の人

↓

1: やや苦しいポジションからハイクリアを打てるようにしてホームポジションを確保する。

2: ネット前のはね上げは、とにかくネットの割合を低くして、ストレートのドリブン等を多用する。

\*この場合、ホームポジションは、あくまで通常より半分ネットより遠い位置にしておく。

3Step サービスの有無によってプレイを変えてみる。つまり、サービス権有→コースを思いきり狙ってみる。

サービス権無→相手のコートに返球することが1番!!  
打つ球がなくなったら、ボダイにスワッシュしちやえ。

↓

みんなが思ってるような無意味なショットじゃないんですね、これは。

今度やってごらん。楽に返球を待てるハズ。

も一疲れたからこれでおしまい。

とにかく、ゲーム練習する時は、いくつかのPointをピックアップしてそれに注意してやってみよう。じゃなきやいつまでたっても○○君だよ。

e x) 馬場選手 対 永井(直)戦5/25

1. 主としてフォアの奥にドリブンクリア。彼の返球はストレートのドロツツ(しかもクサイ)に限るのです。

2. まだまだしよーがねーから、体力強化のためラリーを長くしちやえ(永井の疲れた顔みてわーらおっと。)

1・2は冗談として、たいいていは馬場選手の場合、相手の返球をよむ(判断をすばやくすること)がゲーム練の第1の課題です。(最近)

くやしかったら!よまれないステキなショットを打ってごらんなさい。

筑波には筑波のすばらしいバドミントンがある。筑波のバドミントンにはどうしたってかなうわけがないのだから、慶応のバドミントンをみんなで模索したいんだ。

4月11日(日) 馬場

“早坂へ謹告!”

鈴木さんは、今日オレにこう言った。

「早坂はダブルス、イイネエー。ワン! シャトルが早いからなあ。」

泣かせるじゃあ。ありませんか。早坂クン。君は、2年生からいくらザルザルと非難されようと断じて鈴木さんのこの期待に答えなければならぬ。

本日のメイン・イベント…

大山クンVS清水 (おとうと)

清水クンは「大山さんて、本当に大学生なのであるうか?」という、いぶかしげな表情を最後までしていました。そして、女子大生のパワールの前に無念の敗戦を喫してしまったのです。

---

## 部誌より転載

小柳 尚久 (昭和59年卒)

1983年10月12日 (水) ○/◎

我々の部誌もドンキーコングが流行っていたあの頃から1年半たち、Part6に入って、内容もかなりシビアなものになって来た。我々が2部で1部昇格をめざしていた頃から1部へ飛び込み、新たな上位進出という目標めざして戦ってきた歴史が、1頁1頁、各人の1文字づつに刻まれてきた。願わくは我々のバドミントン部の年輪として、いつまでも存続して行つてほしいと思う。

先日のミーティングに参加出来なかったので皆様におわびをすると共に、この場をお借りして発言させていただく事にする。本来、クラブの発展の為の意見交換の場であるミーティングでの議題が、“ミーティングへの参加”という第1歩の段階で足踏みしている状態を残念に思う。

これだけ多くのプレーヤーが集まるのだから違う意見がいくつか出て来るのは当然の事であり、中には意見や価値観の衝突さえ現れて来よう。しかし、だからと行って、そういった違う角度からのさまざまな意見を出し合わなければ、クラブの団体としての発展は期待し得ないのではないだろうか。ましてや、同じ大学、同じバドミントンプレーヤー、バドミントンを通じて、共通の“LANGUAGE”を持った我々に根本的に水と油の様な意見の分裂などあり得ない事だと思つた。だから部員1人1人に、バドミントン部部員として発言する勇氣を持つて欲しいと思う。

我々は、誰一人例外なく、バドミントンのプレーヤーである。そして、プレーヤー1人1人は、特権を持つ。それは、コート上で自分を

表現出来る事だ。自分のすべての知力、体力をコート上で出そう。そうすれば、相手の為にも、そして同じコート上でプレイをするプレイヤーにも大きなプラスになると思う。しかし、我々は人生の大半をコート外で過ごしている。従ってコート外で学ぶ知識や経験が自分の能力に大きくかかわって来る事は誰にでも想像できるだろう。練習時間だけにバドミントンをするのだと思っている者も、次第に日常生活のフイジカル、メンタルな、或いは栄養や学習などが大きく自分の能力に関与している事を理解してゆくものだと思う。そういうコート上で、なかなか表現しにくいものを言葉にして、或は文字にして、さまざまな伝達手段を使って、交換してゆく場がミーティングであり、部誌ではないのだろうか。

我々はバドミントンに対してはもちろん、部の運営、組織の運営等に関して、まだまだ未熟でとても大人には及ばないだろう。しかし、それを我々のバドミントンへの情熱と愛部心をもって乗り越えてこそ、いつしか“良いクワラズ”へ発展を続け、我々のバドミントン部が世界のバドミントン界に誇れる物となると思う。

### 塾高、女子高 8 ミリ研究

8 ミリでプレイヤーのフォーム等をとる利点は何と云っても、後でスローやコマ送りでそれを分析出来る事にあるでしょう。

今回は高校合宿参加者のみとなりましたが、わずかなカットからも多くの事を学んだ様な気がします。本人が見て納得する事が1番大切ですが、私からの分析結果を、ここに独断的かつ偏見的に発表します。

**岡本** 打球の下に入る時の位置が安定していない。従って、スイングに安定性を欠き、コントロールをくずしやすい。

**阿部** ラケットをバックスイングにもってゆくのが遅い。落ちて来る打球にはあわせやすいが、生きているクリアに付してはラケットがおくれる。バックスイングが浅い。肩が大きなスイングを生む力となっていない。上半身の回転と下半身があっていない。フットワークとストロークの一体化がなっていない。

**石井** バックハンドのドライブの時に手首が回外運動をしていない。(いわゆるドライブのノックの時の運動となっている。)

**小川** 打球時にリストの運動が固定されている。(スナッチが効かない) ハイクリア時には問題ないが、ドリブンやフオアの奥のリターン、ラウンドに押された時に、腕と肩と体だけがなく、手首のスナッチを使って打つ時に威力がない。無理に体で打とうとしている。バックハ

ントが第3段階である。→可動範囲が狭く、フオロースルーが無い。  
**早坂** 打球後のステツザにランテシポの遅れがある。体重が後ろに残り気味である。

**大山** 腰の回転運動を使っていない。(いわゆる松田さん打ち)にもかかわらず、上体の回転を使おうとして、全体にぎこちないフオームとなっている。ラケットの持ち方が短い。軽く、ゼリツツザの細いラケットで、根元を持った方が良いのでは!？上下運動が多いフットワーク→ムダな体力消費につながる。ホームポジションでの構えが極端に高い時がある(小川も同様)ラケットが出しやすすい右足が少し前の構えを心掛けた方が良いのではないか。

**酒井** 羽根にあわせてさがるくせがある。羽の落下点に先まわりが出来ない→“よゆう”が無い。シヨートサービス時シャトルがラケット面にあたっていない為に、かえってコントロールが難しくなっている。→ゼリツツザが原因かもしれない。

**草場** シンゲルのサイドのレシーブなど手は出ているが足がついていない。体重の移動が足で行なわれず、上体(首からか??)からゆく為十分な体勢になる事が少ない。…しかし、それなりのショットは打てるのだが。

**小出** 打球の下に入れず、上体をそらせる事によってインパクトしている。従って戻りが遅れる。バックのはね上げから曲がらない→ワンバターン→筑波のはね上げを参考にせよ。腰の回転を使っていない。タイミンクの取り方が上下運動を使ったハイクリアに対したものでドリブン被打れた時、遅れる。

**藤原** 球の下に入っていない。フットワークのステツザを大きくするか、もう1度つけ加えるかをして、球下に入る努力を。特に、フオアの奥の球に対して腰が入り切らない。→前に出るのが遅れる。

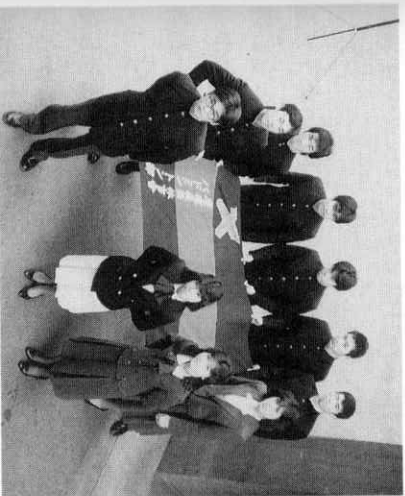
多かれ少なかれ、思い当たる所はあるはず!!人の振り見て我が身をなおせ。  
 いかかでしたかな。

## 部誌より転載

五月女 季孝 (昭和60年卒)

9月16日 (木) 乙女

こんなはずじゃなかったんだがなあ。結局10—5と大差で負けた。あと3ポイントで勝ちなんだからそれほどの大差でないと思えば思え



(左端より右回りに) 早坂・阿部・小田・岡本・藤原・草場・五月女・池田・米倉(酒井)・早坂(大山)

ないこともないけど。はじめのシングルス5ポイント中2ポイントはとらねばならなかったのに0—5とは。やはり下級生にもう1歩の頑張りが足りない。リーグ戦を前にいい教訓となった。

対熊田戦。試合のコールがある。3コートの手端に立つ足が震える。ガクガクだ。すごい緊張感、援部の応援。「頑張れ五月女。フレーフレー五月女。」おーあの援部が自分の名を叫んで応援してくれている。血が騒ぐ。燃えてきた。だけど体がかたくなっている。この手足が自分のものじゃないみたいだ。いつもの練習のときの様なつもりで

やるんだと自分にいきかせる。自分にいきかせるなんてこと本当にあるんだとこの時はじめてわかった気がする。次第に落ちついてきた。話がちよつとはずれるが、慶早戦前に早大記念会堂で練習をして体育館になれておいて良かったと思った。この体育館で練習をしないで試合をして、試合の時に練習の時の様なつもりでやるうとしてもなかなかできるもんじゃないもんネ。さて落ち着いてきたものまだ緊張していて、思うようにシャツルが飛んでいかない。部内では決定打となっていたスワッシュも拾われる。いやなことに熊田さんのサーブやクリアーが浅くてスワッシュを打って下さいという様な所へ上がってくるのが多く練習の時の様なつもりで打つが決らない。いつしか早く決めようという気持ちが強くなっているのに気づくと相手のペースにはまっていた。こりゃいかんとタオルで顔をふき、ロージンをとったり、ラケットを変え、気分一新してコートに入ると熊さんタインタコトナインナと思われ、すぐ同点となるが、いつのまにか、又、決めタイ、決めタイという前述の様な感じになっている。長いラリーの中、ほとんど自分がおしているながら最後にコートを割るミスが多く目立つ。次第に足が重くなってきた。逆をつかれる。足がすぐ出ない。やばい5—12だ。ロージンを手にとる。

この続きは乙女君まで。フアンレターよろしく。

前日まで、あれほど勝ちを信じて疑わなかったのに……今だに信じられない。悪夢のようだ。何故こんなにも弱いのか。

「いいクラブ作り」を目標(3年以下に与えられたギム)としてこれからやっていこうという直前にこの結果。いくら長い目で見て勝つことだけを考えたクラブ作りは慶応のやる事ではないし何も後に残らな



いとはいえ、こんなにも弱いと、こんな目標でやっていいのか不安になってしまう。

馬場さん達4年生のひっぱってきた今年のチームは「いいクラブ造り」の第1段階である自由な、学年の違いなどからくる意味のない拘束のない型をつくりあげた。これは今までの慶大バド部の歴史の中では考えられない様などでもない事であり、「いいクラブ造り」の第1段階としては成功したものだといっている（1年はかかりすぎた。）

しかし、本当に成功したかどうかはこれから先のクラブの動きしないで変ってくる。今のこのクラブの状態はどっちにころぶかわからない。つまり、いいクラブになる様にも思えるが、各人が「自由」の意味を取り違えるとこのままずると悪い方へ進み、弱体化しクラブとしてもたいしたことのない同好会の様になってしまう可能性がある。

この危機を乗り越え、強くそしていいクラブを作っていく為には、部員各々の協力が必要だ。今俺達は何をしていかなくてはいけないのか。各々で考え話し合って欲しい。（「いいクラブ」というのは「いやすいクラブ」「住みやすいクラブ」ではない！）1人1人の部員が1つの歯車で、その1つが欠けるとクラブという機械はこわれて意味のないものになってしまう。それぞれが歯車。クラブの中で必ずその1つの歯車のすべき役割というものがあると思う。

## 部誌より転載

阿部 信正（昭和60年卒）

3月13日 阿部 信正

欠席者 少数

練習内容 2部練習（ノック、サーブアップ、ウエイト、2・1スラッシュなど）

一言

なんだ、なんだ、一体どうしたというのだ。最近我が部には、活力というものが無いではないか。まわりを見れば、何かニヤニヤしている者も多い。全く緊張というものが感じられない。少なくとも緊張しているふりをしているだけである。まあ、それはよい。だけど3年生は、いったいいりーグ戦で勝つ気があるのか。彼らの精気のなさは下級生に対して悪影響を与えるに違いない。もつと闘志を出して、体でアピールしてもらいたいものである。しかし、悪いのは3年生だけでは

ない。我々は重大な過ちを犯してはいまいか。我々は甘すぎるのではないだろうか。ドライブの打ち方がどうの、ハイバックがどうのというのは、2の次である。問題は、精神である。本当にこれで1部に上がろうと思っただけなら、道のりは険しい、いや不可能ではあるまいか。もつと各々が自分にきびしくなれないものだろうか。練習内容に欠陥があると思っただけなら、練習後にそれを補う練習を自分でやればいいではないか。ストロークに不満があるなら、練習外に徹底的にやればいいではないか。強くなるには、やはり人のやっていいこととの10倍とはいかなくても少なくとも20倍くらいいいものをやらなければダメである。これは何もバドミントンが強くなるということに限ったものではない。(注、練習を多くやっていても、決して強くならないという人もいる) この単純なことを忘れてはいまいか。

僕の見どころ、練習後は風呂を浴びに、早々と姿を消す者が多い。もし強くなりたいと思っただけなら、この辺、もうちょっとなるとかなりそうなのである。

また、我が部には、何か自分が強くなるというより、みんなが仲よく強くなっていくという風潮が見られる。確かにこれは結構そこには美しい人間愛が感じられる。しかし、しかし。自分を最も成長させ、かつ部全体のレベルをも向上させるのは、個人競争ではないか。あいつには負けたくない。この単純な闘争意欲がおのおのを高め、かつ、部に利益をもたらすと僕は信じている。

## 部誌より転載

小出 行雄 (昭和60年卒)

5月11日 VS横国 5—2 小出行雄

「7—0」で勝てるど誰もか信じて疑わなかった2日目。3部上がりの横国にすんなり勝てたのは馬場さんと馬永組と石井さんだけでした。なめてかかっていった自分が恥しくなりました。とうとう小柳さんにワッショイをやらせる羽目になってしまったのです。(ジャンピング、ワッショイ御苦勞様でした。)痛切に感じたのは彼らの「1球に対するひたむきさ」でした。当然決まるはずの(この意識が大敵なんだ!)ショットが何度、こちらのコートに戻ってきた事でしょう!シヤトルがコートに落ちるまであきらめない純粋な精神が自分には欠けている。まさに彼らのプレーは“純粋”という言葉がびびったり来るように思っ

ました。バドミントンをするのに1部も2部も3部もないんですね。「なんとか1部に上がりたい。」という言葉の裏に、「1部に上げられただけで何か強くなれちゃうんじゃないか。」的な非常識な期待を抱いていた自分としては、少なからずSHOKINGでした。1部の人は1部の意識を持って1部の努力をするからああいうプレーができるだけであって、たとえチームが1部であっても、各人の厳しい自責と意欲を持たない人間はいくらでも下等な(?)プレーにとどまっていることが可能だ(日本語じゃないな。ゴメンナサイ)という現実を思い知ったような気がしました。皆さん!!入替戦で勝って今の自覚を一新しましょう。

## 部誌より転載

永井 直彦 (昭和61年卒)



草場・永井

4月16～17日 (金→土) 永井直彦

鎌田さん黒沢さん戸崎さん城戸さん小柳さん藤原さん草場さんなどの名選手を次々と体育会に送り出している“名門”慶応義塾高校出身の経済学部の永井直彦と言います。どうぞよろしく。

＝自己紹介＝

・身長170.4cm 体重61.5kg 視力0.1—0.1  
・赤い鳥幼稚園→慶応義塾幼稚舎→同普通部→同高等学校→同大学

・好きなもの ケーキ、果実、釣り、バリエーショナルロー、中島みゆき、ステイシーワンダー、バドミントン、海、テレビ、巨人、西武、マシハットランスマフナー、薬師丸ひろ子、スクエア、苗場、原宿、渋谷、六本木、高倉健、レモンジュース、ボズスキャツクス、松田優作、「北の国から」、オフコース、ビデオを見ること

・特技 スキー、平行スワッシュ、1夜漬け、クロスネット (成功率、好調時で20%)

・嫌いなもの 2—1、カラオケ、ピエマン、クリアー、陸サーフ  
一、クリスタル族、カンパーナ、チャクラ  
・昭和38年7月18日長野県長野市生まれ18才  
・性格

(その1) ケンカの時、最初キツカケを作ってえらそーなことを言っ

で、いざ本当のケンカになると柱のかげでワーワー言いながら柱のかげから戦況を見守る勇氣ある少年です。

(その2) 好きな女の人に会う前はどんな話をしようかと3日位考えていざ会うと「よう、元氣一、またね。」

(その3) メロドラマを見ているとまわりの反応を見て思わず笑ってしまう純な少年です。ゴクン。

(その4) 真面目にノートを取っても、いつも人のをコピーしてしまう自信に満ちた少年です。

＝体育会までの歩み＝

S56、9月 早慶戦勝利→引退 (自分がやった試合がいつちやんつまなくてみんなわいているのに実は白かった)

同9月 KBFに入部決意

この間スポーツを離れ健康的な麻雀等に熱中、卒業までにクラブ帰り計2日。

S57、2月KBF以外の同好会に変更

4月3日 ひたすら目立たぬようにしていたが、いきなり背の高いメガネをかけた2年生におさえつけられる。

3・5～8日 KBL、クリア、エリオット、MBAシャトル、KBFの説明会などで点々本命KBLにしめ切られる。

9日 KBFの練習に参加、ベンベンに負ける。

10日 午後ミルキーウェイ、夜シャトルクラブと2部練。

11日 ミルキーウェイに固い意志をもって入部決意!

12日 Shopで水村さんに会い体育会の変貌ぶりを論される。同夜半体育会へ乗り換え決定。

13日 両親に相談→無視される→以後断絶。

14日 禁煙。

15日 自分で高校ボタンを大学ボタンにつけ換え、所要時間約1.5時間。

16日 思わず入ってしまった。ゴックン

さありーグ戦だ。(来年いや再来年いや再々来年には出たいな)

## 部誌より転載

木村 能成 (昭和61年卒)

9月21日 (水) 藤原さん21才

Part5、初登場。

さて、早慶戦も終って、土曜日からはリーグ戦、何もしないうちに月日がたつようで、こわい気がする。このまま4年間で終わってしまうのではないだろうか。最近は不安で一杯だ。

早慶戦で自分は裏方に徹したつもりだった。あまり、縁の下の力持ちというのは、好きではなかったけれど今年に絶対勝てると思っていたから、少しでも、レギュラーに気分良く試合してほしいと頑張ったつもりだ。しかし、あんなに応援しても負けていくみんなを見ると情けなくて、涙が出る思いだった。自分よりも、もっと頑張った平野さん、岡本さん達はもっと悔しかったと思う。来年は自分の力で勝ちたいものだ。

あの早慶戦でも、慶応の精神的弱さが、もろに出してしまった。今度のリーグ戦でも、多分出ることだろう。なぜ、あんなにプレッシャーに弱いのか！俺は、いつもの練習に厳しさがなければと思う。確かに、色々な知識を得て、自分の体を考えるようになってきたが、それでかえって自分自身、疲れもそれ程ないのに休んだり、手を抜いたり、だから弱くなったんだと思う。春のあの練習に比べたら、今なんて半分も疲れないはずだ。みんな、自分に対して甘すぎると思う。精神力がないのは、今の練習そのものにも問題があると思う。もっと、俺はきびしくてもいいと思う。

春の頃、馬場さんは鬼のように見えた。何で、こんなにしなくちゃならないのかと思う程だった。今は何となく優しくなり過ぎの感じがする。最後、もう一花さかすためには猛練習しかない。でも、馬場さんに頼ってはダメなのか。五月女さんお願いしますよ。

## 部誌より転載

諏訪 康仁 (昭和63年卒)

6月23日 (土) 諏訪

屈辱、屈辱、屈辱、屈辱、屈辱。悔しい、ちきしょう、私は負けた。関東個人戦では5月12日(火)にはシングル、5月15日(金)ではダブルスで、どちらも1回戦負けであった。長い間バドミントンをやってきたが、このような無様な試合は初めてである。大学生になって初の公式戦ということで緊張感があがってしまったということは原因の一端にはならない。私はその日リラックスしていた。自分でも不思議なほど冷静であった。しかしいざ試合が始まるとミスの連発に

終始してしまった。だがそうかと言ってミスした後にあせってしまったわけでもない。淡々と試合をしていた。コースを狙ってはすれども、あまり気にせず、また同じコースを狙う。強気で攻めまくったはずであった。その結果は惨敗であった。スコアは15—9、15—12であった。

前述のはシングルスについてであるが以下はダブルス。シングルスで負けたことにより背水の陣で試合に臨んだことよって、やや内容のある試合にはまったが、それでも1ゲーム目は軽く取られて、2ゲーム目は14オールセットインダの末3—2で取り、3ゲーム目は15—12で敗れた。五味 潤さんには悪いことをしてしまったと思う。肝腎要のところでの私のミスが出る。どちらの試合にしても相手は決して強いとは言えないプレイヤーであった。調子もそんなに良くなかったようだ。その様な相手に負けてしまったのだ。原因は自分にあるに決まっている。フットワークや球回しに難があることはわかりきっている。試合中に先輩たちの戦術的アドバイスを聞いたにもかかわらず、それを実行できなかった頭腦的な問題もある。4月22日に2回目の部誌を書いた時、私は「…もつとフットワークを速くしたいし、各ストロークも完璧といかないまでも適当に打ちたい…」と書いている。あの時点から2ヶ月立ってみて何の進歩もみられなかったわけである。実に残念だ。

ちよつと前に先輩から「お前はショット力があるのだから後はフットワークをもつと速くしろ」と言われた時、私が思ったことはフットワークの不完全さに対する不満ではなく、ショット力に対する満足であった。フットワークと各ショットを別々に考えていたわけである。そのようなことではだめなのだ。「フットワークの伴わないショットなどというものは試合において何の意味もなさないのである。」こんな当り前のことを書くことに対して、いささかの抵抗を覚えるとともに、これを肝に銘ずる必要のある自分に無性に腹が立ってくる。

私の次の目標は新人戦で勝つことであるが、最終的な目標は、「負けないプレイヤー」になる事である。負けない＝勝つであるが、悪いときはどうしようもないというのではなく、調子の良い時はもちろん悪い時でもそれなりに自分のプレイヤーを調整して全力の出せる、そしてつまりは負けない事になるプレイヤーにだ。



後列 安保・木村・中村・安藤  
前列 諏訪・園田・岩田

以上、思い付いたことをとめどなく書いてしまったが、最後に「のと元過ぎれば熱さを忘れる」という諺があるが、今日書いたことをいつまでも忘れず今後の練習に励みたいと思う。口先だけでなくそれを実行することも勿論のことである。

## 部誌より転載

園田 直孝 (昭和63年卒)

i) 自分は動けないとよく言われる。自分でもそれはよくわかっている。服部さんも書いておられたように、シングルの時は動いていなかったようだ。先輩から「もつと動け！」と応援声がたえず聞こえていたが、はつきり言って、自分はどう速く動いていいのか解らず、あせってしまった。サントリーのような約束練習よりもオールロングやオールシヨート、ノックのような、反応を養う練習が自分には必要だ。五月女さんも動きながらのラケットワークを身につけないといけないと話されていた。先輩方も、この点で苦労してられたんだと思った。でも、誰でもそうだったんだと安心してはいけな。遅かれ早かれ、よくするんだったら、早い方がいいにきまっている。先輩の苦労話を是非聞かせてほしい。

ii) 今日のダブルスは、めちやくちやだった。何と言われても仕方がない。「もつと動け！」の声は今日もとんだ。1セット目は緊張していたが勝った。サーブがはいらない！レシーブ力=0、安保が後ろに回ることが多かった！2セット目は12点まで勝っていたのに負けた。永井さんから「慶応のハイメンを着てるんだろー！」と言われた。この言葉は、バドミントンを続ける限り忘れないうと思う。

## 香港遠征誌—はじめに—

小出 行雄 (昭和60年卒)

来る日も来る日もコートの中でシャトルコックを追って汗を流している学生プレーヤーの皆さん。バドミントンをエンジョイしていますか？コートに何を見えていますか？バドミントンを通して自分の限界に挑戦するのは素晴らしい若者の特権だと思います。そして、青春をこのシャトルコックに賭けているのは僕達だけではありません。世界中



最後列 五味淵  
第3列 石井・佐藤・小柳・ウイリアム  
第2列 ウイヴィアン  
最前列 草場

のいたる所に僕達と同じように勉強に縛られ、挫折しながらバドミントンを心から楽しんでる若者がたくさんいるのです。今回4泊5日という短い期間ではありましたが香港に遠征したメンバーは若いプレイヤー達とまずコートで戦い、そして心からの歓迎を受け、彼らのバドミントンに対する姿勢を感じてきました。プレイヤーがバドミントンに熱中する姿はどこに行ってもかわらないのではないのでしょうか。若い7人のプレイヤーによる「海外遠征体験記」

この遠征誌があなたの明日のバドミントンへのインパクトになれば幸いです。

昭和60年12月22日

## 香港への途(みち)

小出 行雄 (昭和60年卒)

「有志を集めて香港にバドミントンをしに行ってみないか。」

小柳尚久さんから初めにこう誘われたのは僕が引退を間近にした昨年(1984年)の10月始めだった。秋のリーグ戦メンバーから外され、くすぶるバドミントンへの情熱のやり場に困っていた時だったので、その時は即座に「面白いですね、行きましょう。」と気軽に返事をしたのだった。

クラブをやめて、専門学校へ通うかたわら何気なくバイトを始めてしまった僕は10月も中旬になると、目標を見失ってはぼんやりとしていた。勉強をしなければいけないという強迫観念だけはつのが、少しもやる気にはならないという中途半端な日々が続き、「香港なんて行っとうどうする?」と考え始めていた。そんな時に小柳さんはこう言ってくれましてくれた。「今の自分に：これからの自分にとって1番大切なものは何だい?忙しい思いに負けちゃいけない。香港のプレイヤーが僕等の行くのを待っていてくれるんだよ。海外遠征に行くなんて一生の中、今しかできない事じゃないか。目標があるなら、時間は自分で作れるはずだよ。」



この言葉を聞いて、また消極的になってしまっている自分に気がついていた。こうして10月末になって、僕は香港行きを決めた。

一般に大学生の海外遠征というと、日本ではトップレベルにあるチームが学校やOBの協力を得て、技術を磨きに行くものである。しかし、この第1回香港遠征隊結成のそもそもの目的というのが「自分達の手で何かから何までやりとげる事」であった。一体、自分達は慶応大学に入り、体育会で4年間を過して、自分の手で何かを創ってきたのだろうか。狭い枠の中に閉じこもってつまらないバドミントンしか知らないで、ここまでできてしまったのではないだろうか。バドミントン・プレーヤーを自負するならば自分達にしかできない何かをやつてこそ本物ではないだろうか。このような強い自意識を持って集まったメンバーが8人。そこには、慶応義塾高等学校の2人も参加していた。

「自分達の手で第1歩を拓く」理想を掲げた以上、遠征の計画・手続・準備等は全てメンバーの知恵と行動力に任されていた。10月末に行なわれた第1回ミーティング以来、何度も何度も集まっては少しづつ少しづつ夢が現実のものとなっていった。

先ず、手始めに香港へ渡るための準備があった。パスポートを取り、旅行保険に入り、旅券を買う。これだけの事にさえ、マナージャー担当の五味潤君がどれだけ忙しく走り回ったのだろうか。そして、香港のプレーヤーへの記念品やシヤトル等の購入。部長先生やOB会長の承認の受託。香港へ送るメンバー紹介の作成などの雑用があった。

これを6人のメンバーが分担して行つたのであるが、それぞれ忙しいスケジュールの中から練習時間をつくり、こうした仕事をする時間を作り、

「香港に何かがあるのか。」と自問自答しながら、外国でバドミントンに専念できる旅を夢見ていた。そんな時に豊田機械で働く石井OBの遠征参加が決まり、メンバー達は非常に心強く思うと同時に、香港でバドミントンがまた少し楽しさを増すと確信したのであった。

この遠征への大きな不安材料として英語の問題があった。言葉の通じない相手とバドミントンが出来るのだろうか。香港で、迷子になってしまったら生きて日本に帰ってこられるのだろうか。そんな不安を少し解消してくれたのが、小柳さんの友人デービッド君の英会話教室だった。日本に留学中である彼は、覚えてたの日本語を交えて簡単な日常表現の特訓(?)をしてくれた。対戦相手のプレーヤーになったり、銀行の窓口係になったり、大変に気を使ってくれたものだ。メンバーにとつては、言葉のあまり通じない人とも、すぐにうちとけられ

ると実感したことが、1番大きかったのではないかと思う。

こうして、さまざまな障害を乗り越え、いよいよ香港へ旅立つ日が近づいてきた。香港のプレーヤーはどんなバドミントンをするのか。うまく意志が通じあって楽しい時間を過ごすことが出来るのか。

期待と不安が入り混じって興奮状態に入りながら、まな板の上のコイになったような気分で7人は12月20日を迎えたのだった。

---

## ワネージャーから見た香港遠征

五味淵 努 (昭和62年卒)

この原稿を書いていると、宿舎であるYMCAの机上で、電卓を弾きながらチームワネーの計算をしていた事が思い浮かぶ。遠征中の5日間、私はチームワネーを管理するという神経を使う仕事に振り回された。しかし、今となってはそれほどの苦勞も良い思い出となっている。

香港遠征がまだ漠然としたものであった時からワネージャーの仕事は始まった。バスポート申請に対する代書依頼、航空券購入、A I U 保険加入、記念品購入などを出発前までに整えとかなければならなかったのである。出国のための準備が整ってくるにつれて、本場に香港に行けて、現地の人とバドミントンができるんだという実感が湧いてきた。そう思い込むと複雑な仕事でも難なくこなせるから不思議だ。出国の準備が完了して、後は出発を待つだけだ。ここまで来るのは長かった。箱崎のエアターミナルからリムジンバスに乗って一路成田へ、車内で座席に身をあずけてこれからのことを考える。ワネージャーとして上手く仕事をこなせるか、恥しい試合はしないか、自分のベストを尽くせるかなどのが頭をよぎる。バスは成田へ着いた。出国審査を済ませ、軽い食事や買物をしながらフライトの時間を待つ。フライト時間になり飛行機に乗り込む。試合に対する不安、現地の人との交流に対する期待、そのようなものに乗せて飛行機は成田空港の滑走路をすべるように離れた。

窓から香港の町が見えてくる。飛行機は空港に降りていく。入国審査を終えてロビーに出る。ああ！遂に来たんだ。そんな感慨にふけっているところを、“ワネージャー。トラベラーズチェックを現金に換えてきて。”という言葉で現実を引きもどされる。自分の語学力への不信とワネージャーとしての自覚をお共にして、換金所へ行く。多少不手際はあったものの無事に完了。こんな感じで、現地でのワネージ

メントが始まった。

香港の物価は安い。特に食費、交通費が安い。遠征中には、有名なフロートイングレストランで優雅にデイナーをとろうということで、朝食は近くのスーパーで買い込み金を浮かした。そのかいあって3日目に太白のフロートイングレストランで見事な食事にありつけた。食事は安くてもうまいものはかりだった。交通機関としては、私達は主にタクシーを利用した。中心はタクシーであったが、5日間の滞在中に香港の交通機関はあらかた乗りつくした。交通費も安かった。料金の支払い方法やらで多少手こずったが、遠征中ずっと世話をしてくれたジェニーやウイリアム、ビビアン、シェーピン達の助けによって何の不安もなく移動することができた。

換金や1日の収支計算もやっと板についてきたと思ったらもう帰国の日になっていた。

滞在中、私達が金銭面においても身体面においても大過なく過ごせたのはひとえに現地の人達の厚いもてなしのおかげである。ウイリアム達の気配りで私が出国前に抱いていた不安は日中の薄氷のようにとけていった。私のマネージャーとしての仕事が成功したのも、この遠征が成功したのもみんな彼らのおかげである。この遠征によって、私は人と人との交流、親身なもてなしから人間の暖かさを学んだ。このことは数字による収支決算とか、人の金を管理する苦しさとかとは較べものにならないほどの利益を私の人生にもたらしてくれた。私の香港遠征の収獲はここにある。

最終日、香港を発つ日があった。夢のような5日間はこの別れの瞬間に凝縮されるのだ。色々な思いを乗せながら飛行機は香港の町を飛びたっていた。香港遠征はたしかに終わった。しかし、その思い出、この遠征を通しての肉体的な成長は、私の人生に深く残っていくことだろう。

## 第2の故郷～香港

石井 宏明 (昭和58年卒)

流れ星が目の前をスーッと通り過ぎようとした瞬間、パッと閃光を放ったかと思うと、1瞬にして過ぎ去ってしまった。まぶたに強烈な印象を残して……。私は、まだその残像の中にいる。

今回の香港遠征で、我々は何を学んだのか。たぶん、1人ひとり、

全く違った答えが返ってくるに違いない。むしろ、何も学んでないという答えの方が多いかもしれない。要は何を学んだか、ではなく何を感じたか、なのだから。

幸いにして我々は、学生、ナショナルチーム、一般の社会人etc. 色々な人々とバドミントンを通して交流する機会を得た。「中文大學VS日本大学 (KEIO.UNIV.)」という掲示を出して、我々を歓迎してくれた中文大学の皆さん。本当にスポーツが分ってる人々がつくったんだなあ、と思わせるジュビリーでのナショナルユースの皆さん。バドミントン専用コートとサングラスと素晴らしいライナーで、我々をゴージャスなバドミントンに引きずりこんでくれたCRCの皆さん。そして言うまでもなく、何から何まで我々の面倒を見てくれた、2ヶ国語の名前を持つウイリアム、ジェニー、ザイザイアン、そしてズン、香港チャンピオンのチャセン・チャー・チャイetc.彼らが感じさせてくれた「香港」および「香港のバドミントン」は我々が日本で、あるいは国際社会で生きていく中でかけがえのない“宝”となるだろう。

こういった強烈なインパクトのほかに、もう1つの“宝”は、これから先、7人のメンバーがどこであつても語り尽くすことのない思い出だ。おそらく、空港での別れのあまりの悲しさはメンバーに共通のものだろう。私はこんなに多くのものを与えてくれた全ての人々（もちろんメンバーのみんなも含めて）に心から感謝したい。そして、香港で会った人々の誰か1人でも日本に来るようなことがあつたら、何が何でも会いに飛んでいきたい気持ちである。